

アポイのヒメチャ保護活動②

2021年6月12日

永盛・辻

クラウドファンディングの支援を受けてのヒメチャマダラセセリの保護活動の前半戦が終わります。日本チョウ類保全協会の中村さんの「神の手」によって母蝶から1500個を超える卵を得ることができました。ここから孵化した幼虫を順次生息地にもどし、ネットをかけて終齢幼虫・蛹まで育てます。

私永盛は北海道教育大学旭川の安藤研究室と共同で、様々な気象条件と成長過程、食草の選好性や飼育機材を含めた飼育技術の開発など域外保全の飼育のノウハウの基礎データを取ります。また、安藤ゼミの学生は現地でトレイルカメラを設置し、ヒメチャ幼虫の行動、天敵の影響などを記録します。

今回は私と安藤先生、学生2名、横浜から相棒辻、虫研の後輩Kさんも加わりました。例によって様似入りの前後は途中十勝に寄り別の蝶の観察を行いました。これは最後にまとめて報告します。





辻・K組とはここで別れる。

朝7時過ぎに出発し、5合目で一休みし、馬の背への急な坂を上りはじめるが、天候は今一つ、蝶が飛ぶ陽射しは期待できない。7合目下で以前私が見つけておいた1齢幼虫の様子を見る。トレイルカメラは残念ながらクローズアップレンズが外れ、三脚も動いていてうまく撮れていない模様。幼虫はまだ1齢の様子で新しい巣の中に入っていた。安藤先生はもう一つ別の巣を見つける。ここは風が当たらないいい環境なのかもしれない。



巣の中の1齢幼虫、体を折り曲げてるのはいつもの姿勢。葉の表面を舐めるように食べている。

新伐採地に移動して、トレイルカメラのセットを始める。今回は天敵と推測されるエゾアカヤマアリの密度と生存率に関係が出るかどうか調べることにし、中村さんが孵化させた1齢幼虫を使うことにした。

アリの密度を測るために、1分間に1m四方の枠の中にいる個体数を4か所で同時に測定した。新伐採地は切り詰めた食草のキンロバイから新葉が展開し、好適な産卵環境になっている。私は成虫や幼虫探しを始める。



7合目で少し調査した。



アリの密度が違う4つのコドラートを設置する。



こんどはクローズアップレンズもしっかり固定した。

母蝶はまだ飛んでいるという情報を先に入っている保全協会のNさんから聞いていたが、霧が海から押し寄せ、陽射しがとどかない。まだ卵があると思うが、とりあえず幼虫の巣を探してみる。1齢幼虫の巣は葉の表面に作る場合、葉の重なった隙間に作る場合、先端の小葉が開きかけた中に入り込む場合の3パターンがある。



これは小葉の重なりを利用した巣。



小葉の基部に静止する1齢幼虫(黒→)。体の上面に糸を張りめぐらせている。赤矢印は食痕。



これは小葉を綴った巣。大きさから2齢幼虫かもしれない。食痕は葉の裏にシミのように見えている。

5月31日にマークした10個の卵も見てみることに。2個は不明で、その他は孵化し1齢で巣を造っており、また未孵化のものが1個あった。

そのあと5月15日に50卵をネット掛けしたのを見てみることに。5月31日段階でかなりの卵が脱落してしまったのだが、残っていた卵が20個程度あり、その確認。すべて孵化したようだが生き残っていたのは12頭にとどまった。やはり卵ネット掛けは難しい。



5月31にマークしたタグ。



これは孵化したての幼虫だった。



これはまだ孵化していない卵。中の体が透けて見えるので孵化は近い。

今回は一時的に陽が差すことはあったが、成虫の姿は見ることはできなかった。トレイルカメラの設置、アリのカウントを4回実施し3時前に下山することに。辻・Kさん組は最北のTWポイントまでいったよう。辻氏が絶滅が危惧される吉田稜線で1齢幼虫をみつけたとのこと。

帰る途中恒例のザリガニ探し。宿舎ではNさんも交え、これまた恒例の様似昆布のシャブシャブ。



カメラ4台を設置した新伐採地。様似の街が霧の中から遠望できた。



最後にアポイの前後に撮影した十勝の蝶を少し紹介します。暑すぎてチョウも人間もバテ気味でした。

カラフトタカネキマダラセセリ(♀)



ウスバシロチョウ(♂)



コチャバネセセリ(♀)



シロオビヒメヒカゲの交尾



カラスアゲハ(♀)

おわり

T,Nagamori